



# ソウル駐在員通信

vol.19

クレアソウル事務所 所長補佐 菊池さやか

アンニョンハセヨ！（一財）自治体国際化協会ソウル事務所（通称：CLAIR, Seoul（クレアソウル））に派遣されている、菊池さやかと申します。今回は、私が携わった業務の紹介や、セミナー等に参加して学び感じたことをご紹介します！

## ■ 明利酒類(株)がクレアソウル来所

1月18日、明利酒類株式会社の大久保敏正常務取締役兼酒類販売部長と奥田善則酒類販売部次長が、現地代理店であるJin's companyのイ・ジョンズ代表と共にクレアソウルに来所されました。

明利酒類は韓国で「純米酒 天翔」と「純米酒 義理」を中心とした酒類を販売しており、ソウル市内では約300店舗の飲食店に納入実績があるとのこと。今年度実施したABC Cooking Studioとの連携事業（茨城編）や、在韓日本大使館主催の「天皇誕生日祝賀レセプション」、「大使公邸での自治体PRレセプション」の際にも、この2種類を試飲用にご提供いただきました。今後も可能な限り茨城県のPRに貢献したいと力強いお言葉をいただきました。



## ■ 「大使公邸での自治体 PR レセプション」に茨城県ブース出展！

3月9日(木)、在大韓民国日本国大使館の主催により「地方自治体 PR レセプション」が大使公邸で開催。日韓間の相互交流拡大を図るために、韓国の政府関係者をはじめ、自治体、航空関係者、旅行関係者、食品関係者、メディア関係者などが招かれました。約100名の来賓を前に、自治体ブースの一つとして茨城県ブースを出展しました。

茨城県ブースでは、東京からの近さを売りに、梅が見頃を迎える「偕楽園」や筑波山梅林、5月にネモフィラが見頃を迎える「国営ひたち海浜公園」を中心とした観光PRに加え、韓国内で流通している地酒（磯蔵酒造、明利酒類）及びビール（木内酒造）の試飲も行い、茨城の魅力を発信しました。



## ■ 江原ランド（カジノ、中毒管理センター）、平昌オリンピック会場視察

2月23日(木)～24日(金)の2日間、韓国駐在地方公務員を対象としてクレアソウルが主催したクレアソウルセミナーにおいて、韓国の北東に位置する江原道（カンウォンド）にあるカジノ施設及び2018年2月に開催予定の平昌オリンピック会場を視察して来ました。

江原ランドは、廃れた炭鉱地域の経済を再生させる目的で2000年10月にオープンしたカジノ施設です。昨年、江原ランドに来場した310万人のうち、91%は一般的な観光客、残りの9%がカジノを利用したと云うことです。

江原ランドは、国が51%出資する公共企業であり、株式会社でもあります。利益の25%を地域開発基金へ拠出し、同じく利益の15%を観光振興に対して拠出していますが、公共企業でもあるため、江原ランドは無限に利益を追求する企業ではなく、顧客保護の対策も行っています。

具体的には、江原ランドの隣に、中毒管理センター（Kangwonland Addiction Care

Center: 通称: KLACC) を 2001 年 9 月に設立し、ギャンブル依存症に対する予防から社会復帰までトータルにサポートしています。このようなギャンブル依存症対策を実施しているのは、全世界で韓国とシンガポールだけと言います。

中毒管理センターのギャンブル中毒予防治療システムは、予防（広報）、治療、再活（社会復帰）の3つのパートで構成しており、予防から再活までワンストップ管理がなされています。



以下、質疑応答形式で中毒管理センターを紹介します。

Q1: 男女別・年代別で、年間何人の方が江原ランドを利用しているのか。

A1: 入場税で入場管理をしており、2016 年は 310 万人が来場し、そのうち 60 万人がカジノを行った。男女比は 7: 3、年齢は平均 45 才くらい。月に 5 日、年に 60 日を超えて来場した方には強制的に中毒管理センターを利用してもらうシステムとなっており、カジノに行った 60 万人のうち 1% に相当する約 6,000 人が利用した結果となっている。

Q2: 入場者へのチェックはどのように行っているか。

A2: 入場の際に身分証明書（住民登録証）のチェックを行う。通過しなければならない入口を 2 箇所設置しており、二重チェックを行う。

Q3: 「常習性」が問題になると思うが、中毒管理センターを利用した 6,000 人のうち常習者は何人で、どのような対策をとっているのか。

A3: まず、韓国人は月間 15 日までしか入場できない。月間 15 日最大まで来場した者を「多没入者」と見なし、CPGI (Canadian Problem Gambling Index。カナダの有病率の測定方法。) という尺度により専門家がカウンセリングを行う。2 ヶ月連続で 15 日

来場した人は必ず中毒管理センターに立ち寄りなければならない。

Q4: カジノをしない人 (310-60=250 万人) は何を楽しみに来場するのか。

A4: 先ほどの年間 310 万人というのは入場券の延べ発券数であり、何度も来ている人が含まれている。そのうち、カジノをしたのが 60 万人ということ。スキー場もあるので、それを楽しむ人もいる。

Q5: 中毒管理センターの運営は、法律に基づいているのか。

A5: 法律に基づくものではなく、自発的に設立したものである。

Q6: 病院の治療費は誰が負担するのか。

A6: 本人負担はなし。治療費を一度でも支給された人は、永久的にカジノ立ち入り禁止となる。

Q7: カジノの収益金のどれくらいを中毒管理センターの運営費に充てているのか。

A7: 41 のプログラムを実施する事業費に 43 億ウォン。

入院等の治療プログラムに関しては、開設からこれまでに 423 名が利用し、17 億 2 千万ウォンを充てた。2016 年は 1 兆 5 千億ウォンの収益のうち 1 % (150 億ウォン) を中毒管理センターの予算に充てた。

Q8: 患者の家族に対する支援はあるのか。

A8: 直系家族 1 人までに対して患者と同じ支援をする。病院代月 200 万ウォン、3 ヶ月 600 万ウォン。精神科の入院に係る経費は月 20 万ウォン、3 ヶ月 660 万ウォンで、1 人につき 3 回まで利用可能なため、3 ヶ月×3 回の 9 ヶ月 (最大) で 1,980 万ウォンを支給することが可能。退院後の通院治療については、150 万ウォン/人を上限に支援している。

Q9: 中毒管理センターの存在はどのように受け止められているか。

A9: 中毒管理センターの存在はカジノ利用者にとって面倒な存在であるが、カジノ賭博をやめた人にとっては「どん底から救ってくれた母のような存在」と非常に感謝されている。

Q10: 賭博に関係している職員に対して研修を行っているか。

A10: 中毒管理センターの職員とその直系家族は江原ランドへの立ち入りを禁止している。また、江原ランドの職員は 1 人あたり 5 回以上研修を受けなければならない。3,500 人いる職員のうち約 2,000 人 (ディーラー等直接カジノに関わる職員が 1,500 人) が対象となっている。



Q11: 3つの条件(月6日以上、3ヶ月で31日以上、年間61日以上)があったと思うが、一つでも該当したら支援対象になるのか。それとも3つ全てに該当した場合のみ対象になるのか。

A11: 一つでも該当したら対象となる。15日、15日と2ヶ月連続で来場した場合は、クールダウンのため入場禁止期間を設けている。

なお、年間61回以上カジノを利用する人を条件にインセンティブを設けている。利用上限 月15日の利用から1日減らす毎に5万ウォン助成する。月10日の利用にすれば25万ウォンを助成する。自主的に回数を減らすことに対して報償しているので、中毒を防ぐ効果がある。

※一度でもルール違反をすると二度とこのインセンティブ制度は利用できない。

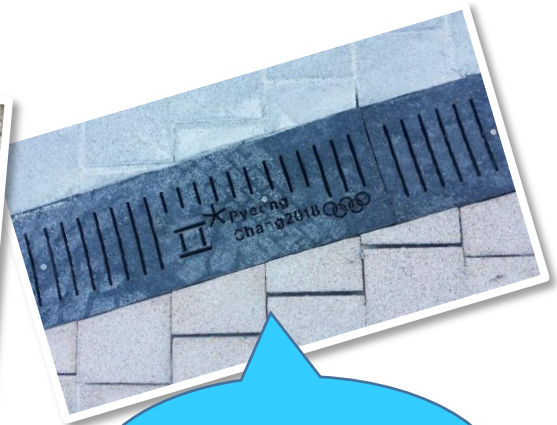
Q12: 賭博中毒だと認定された人を強制的に入院させることはできるのか。

A12: 対応している法律もないことから、強制的に入院させることはできない。

日本でも、特定複合観光施設区域の整備の推進に関する法律(通称: IR整備推進法)が2016年12月26日に公布・施行され、地方公共団体の申請に基づき国の認定を受けた区域にカジノ施設を含む特定複合観光施設を誘致することができることになりました。誘致を目指す自治体は、ギャンブル依存症や治安維持などの地域対策を十分に備える必要があるため、江原ランド及び中毒管理センターの事例は非常に参考になるのではないかと思います。

続いて、平昌オリンピック会場についてですが、江原道東部の沿岸に位置する江陵市にあるオリンピックパークでは、冬季オリンピック競技の中でも、アイスホッケー、フィギュアスケート、スピードスケート、カーリングといった氷上競技の会場が建設されています。カーリング会場に関しては、既存の体育館を改修することにより様々なコストを削減。氷面に文字や絵を施すアイスペイントに関しては、でんぷんの塗料を使って環境面にも配慮。観覧席は平均15℃をキープし、コート無しで快適に応援できるよう工夫がなされているということです。





側溝カバーにも  
Pyeong Chang2018  
の文字が！

アルペン競技は、江原道の平昌郡大関嶺（ピョンチャングン テグアルリョン）に 2009 年にオープンした「アルペンシアリゾート」と呼ばれる複合観光施設で行われます。韓国で唯一、国際規模のスキージャンプ台を有しているほか、リゾート内には、標高 700m の高原の地形を生かしたゴルフ場やスキー場、900 室の客室を誇るコンドミニウムといった宿泊施設も完備されています。リゾート開発をする際に、ゴルフ場でバイアスロンやクロスカントリー競技ができるような設計を行うなど、オリンピック後の活用も見据えた施設整備がなされ、まさにオリンピックのために用意されたリゾートと言えます。

また、気になる交通網ですが、仁川空港と江原道・平昌を繋ぐ高速鉄道 KTX（Korail



スキージャンプ台  
からの眺めは圧巻！！

Train Express) の工事も進んでおり、現在は仁川空港からソウルまで 1 時間程度、ソウルから平昌までは高速バスで 2 時間半ほどかかっていますが、開通すれば仁川空港からは直通で 2 時間以内、ソウルからはたったの 1 時間で繋がるといいます。

2 年後に開催する東京五輪は、季節の違いや、地方ではなく都心での開催である点で平昌五輪とは大きく異なりますが、オリンピック開催後の活用を見据えた施設整備等、参考にできる部分もあるのではないのでしょうか。